

新藤兼人賞  
SHINDO KANETO AWARDS



**第 18 回新藤兼人賞**

2013 年 12 月 6 日（金）東京會館 11 階 ゴールドルーム

主催：協同組合 日本映画製作者協会

協賛：松竹株式会社/東宝株式会社/東映株式会社/株式会社KADOKAWA

株式会社IMAGICA/日本映画衛星放送株式会社/株式会社ファンテック/ブロードメディア株式会社

SARVH 賞提供：一般社団法人 私的録画補償金管理協会

## 金 賞

白石和彌『凶悪』監督・脚本



**受賞者プロフィール** 74年、北海道生まれ。95年、中村幻児監督主催の映像塾に参加。以後、故・若松孝二監督に師事し、フリーの演出部として活動。若松孝二監督『明日なき街角』（97）、『完全なる飼育 赤い殺意』（04）、『17歳の風景 少年は何を見たのか』（05）などの作品へ助監督として参加する一方、行定勲、犬童一心監督などの作品にも参加。監督・脚本を務めた初の長編作品『ロストパラダイス・イン・トーキョー』（10）をへて、本作の監督を手がける。

## 銀賞

奥谷洋一郎『ソレイユのこどもたち』監督・撮影・録音・編集



**受賞者プロフィール** 78年、岐阜県中津川市生まれ。東京育ち。慶應義塾大学文学部卒業。映画美学校ドキュメンタリー・コース研究科修了。映画作家の佐藤真、筒井武文に師事。大学生の時に出会った見世物小屋一座、大寅興行社との交流のなかで初の長編ドキュメンタリー映画『ニッポンの、みせものやさん』を制作、2012年に初の劇場公開作品として上映、その10年にわたる見世物小屋一座との交流が注目され多くの観客を集めた。『ソレイユのこどもたち』はドキュメンタリー映画作家 故・佐藤真の遺した企画、ドキュメンタリー映画『トウキョウ』の一編として発想し制作された。現在は、複数の作家によるマルチプロジェクト企画「Documentary Tokyo」を進行中。

## SARVH

### プロデューサー賞

#### 孫 家邦／菊地美世志『舟を編む』企画



#### 受賞者プロフィール

##### 孫 家邦

1961 年大阪府生まれ。荒戸源次郎事務所にて「どついたるねん」（89 年／阪本順治監督）等を企画、「夢二」（91 年／鈴木清順監督）等をプロデュース。荒戸源次郎事務所を離れた以降、「ファザーファッカー」（94 年／荒戸源次郎監督）をプロデュース。1995 年、リトルモアに参画。

1998 年には「リトルモア MOVIES」として豊田利晃監督「ポルノスター」、渡辺謙作「プープーの物語」等新人監督 4 人による新作映画を 1 年かけて製作・上映する。2003 年、代表取締役就任。

主な作品：「空中庭園」（05 年／豊田利晃監督）、「東京タワー オカンとボクと、時々、オトン」（07 年／松岡錠司監督）、「フレフレ少女」（08 年／渡辺謙作監督）、「ウルトラミラクルラブストーリー」（09 年／横浜聡子監督）、「ケンタとジュンとカヨちゃんの国」（10 年／大森立嗣監督）、「まほろ駅前多田便利軒」（11 年／大森立嗣監督）

##### 菊地 美世志

1957 年福岡県生まれ。「鉄拳」（1990 年／阪本順治監督）のラインプロデューサーを経て、「外科室」（1991 年／坂東玉三郎監督）をプロデュース。1994 年にフィルムメイカーズ株式会社を設立、代表取締役に就任。同年、ホリプロ、ポニーキャニオンと共同で『ファザーファッカー』（荒戸源次郎監督）を製作。

主な作品：「東京タワー オカンとボクと、時々、オトン」（07 年／松岡錠司監督）、「ヴィヨンの妻～桜桃とたんぽぽ～」(09 年／根岸吉太郎監督）、「ケンタとジュンとカヨちゃんの国」（10 年／大森立嗣監督）、「まほろ駅前多田便利軒」（11 年／大森立嗣監督）、「テルマエ・ロマエ」（12 年／武内英樹監督）

## 金賞・銀賞選考委員講評

### 審査委員長：豊島雅郎（アスミック・エース）

今年度の新藤兼人賞（新人監督賞）候補作品は126本でした。

厳正なる結果、金賞には白石和彌監督『凶悪』、銀賞には当該賞設立以来初めてドキュメンタリー映画からの選出となる、奥谷洋一郎監督『ソレイユのこどもたち』が選出され、どちらも個性が弾ける作品が残った形となりました。白石監督については、特に異分野から参加のリリー・フランキーさん+ピエール瀧さんの「これでもか、これでもか」という忘れられない個性的な演技を引き出した演出力に脱帽しましたし、奥谷監督には、東京・多摩川河口の捨てられた船で犬と共に暮らす老人の「人間力」を切り取った深い洞察力に感服した次第です。今後、白石監督には、師匠であられる若松孝二監督ばりの映画作家としての個性をもっともっと磨いていただければと思いますし、奥谷監督には、最終選考会時に声が上がりましたが、フィクション映画にもチャレンジしていただければ同業者として嬉しく思います。

最後に、両作の次点には渡部亮平監督『かしこい狗は、吠えずに笑う』が残りましたこと、また、審査委員長個人としては、大根仁監督『恋の渦』と市井昌秀監督『箱入り息子の恋』が記憶に残る作品となりましたことを言及させていただきます。

### 甘木モリヲ（シネバザール）

いつの頃からか、この手のいわゆる社会派と分類される映画にとんとお目に掛からなくなった。金賞『凶悪』は久々に巡り会えたまさに“日本映画”でした。興行的に敬遠されがちなテーマに敢えて挑み、成功を収められた監督始めスタッフ・キャストの皆さま方に敬意を表します。

故若松孝二監督に反骨精神を叩き込まれた白石和彌監督が、次はどんな題材に挑むのか興味が尽きません。

一方、銀賞の奥谷洋一郎監督『ソレイユのこどもたち』は、ただひたすら叙情的に被写体を捉える作風に日本人らしからぬ感受性を感じました。鑑賞中、映画というより音楽を聴いてるような錯覚さえ覚えました。米とパンのような対極にある二人の新人監督、今後に大期待です。

### 白井正明（シネムーブ）

今回、初めて審査員をやらせていただきました。対象作品のほとんどは、低予算で製作され、十分な宣伝活動を経て公開されたものではないこと、その仕方も規模や上映回数に決して恵まれたものではないことを改めて実感しました。現状のシステムの中でのそういう先入観に捉われず「作り手の意図が作品の隅々に反映されているか？」を念頭に審査したつもりです。

『凶悪』は、監督の演出にキャストが抜群の演技で応え、救いのない話でありながらエンターテインメント性も兼ね備えていて秀逸でした。白石監督、おめでとうございます。また、こういう企画をぶれずに製作し、勇気を持って公開し、キチンと結果を出した製作陣にも深い敬意を表します。

そして、『ソレイユのこどもたち』奥谷監督おめでとうございます。今年は『立候補』というもう一つの秀作もあり、ドキュメンタリーの評価が押し上げられたカタチで、高評価のまま受賞となりました。個人的には『チチを撮りに』、『箱入り息子の恋』も受賞に値するすばらしい作品でしたが、きめ細かい演出が光るウェルメイドな作品は、凶悪パワーに押されて今年は分が悪かったように思います。

## 梶井省志（アルタミラピクチャーズ）

今回、新藤兼人賞に選んだ白石和彌監督（金賞）と奥谷洋一郎監督（銀賞）はそれぞれ前作「ロストパラダイス・イン・トーキョー」「ニッポンの、みせものやさん」で高く評価され、着実にキャリアを積み重ねながら早くも代表作となる「凶悪」と「ソレイユのこどもたち」を作り上げた。ともに作家としての力量を感じさせる作品であり、本格派の新人監督が登場したことを喜びたい。そして両監督には今後も大いに映画を作り続けて頂き、それぞれ劇映画、ドキュメンタリー映画の世界を牽引してくれることを期待したい。

残念ながら今回は選にはもれたが、私が高く評価したいと思う監督が二人いる。一人は「かしこい**狗**は、吠えずに笑う」の渡部亮平監督。シナリオ講座で学び、自主製作で本作を撮ったというが、とても第一作とは思えないほど入念に練られたシナリオは意外性に満ちており、作品は観る者を圧倒してきた。そしてもう一人は「立候補」の藤岡利充監督。監督の視点はマック赤坂をはじめ選挙に立候補する者たちの性をうまく捕らえている。選挙期間中の限られた時間の中で被写体を的確に記録し、作品としてうまくまとめあげていることに感心した。

## 山上徹二郎（シグロ）

今年は全体として、新藤兼人賞の審査の対象作品に恵まれたという印象があります。とりわけ脚本がしっかりしている作品が目につきました。監督のオリジナル企画であること、シナリオが書けるということも魅力ですが、同時に、決められたシナリオを元に演出し構成する力が、もっとも映画監督にとって必須のことと思います。金賞の『凶悪』は、確かな演出力とともに、隅々まで細やかにキャスティングされた俳優陣の演技が秀逸でした。

また銀賞を受賞した『ソレイユのこどもたち』は、初めてのドキュメンタリー映画の受賞となりました。優れた劇映画が、時にドキュメンタリー的であるように、ドキュメンタリーが如何にドラマティックであるかを、本作は劇映画と比肩し得るその演出力・構成力で示してくれました。

最近のドキュメンタリー映画は、周囲から厳しくチェックされることのない独りよがりの企画アイデア、進歩した撮影機材、そして予算の面からも、誰もが安易に制作することができ、その結果テーマや被写体に頼った作品が増えているように思います。単に情報を伝えただけなら、テレビという媒体のほうが遙かに優れています。ましてテレビはその公共性から映画以上に様々な規制を伴いますが、テレビドキュメンタリーはそうした規制やタブーと闘ってきた長い歴史があり、それ故にこそ批評性を担保するための戦略と知力を培ってきたとも言えます。

どのような社会性をテーマにしたドキュメンタリーといえども、お金をとって見せる映画である以上は、本質的にエンタテインメントであり娯楽でなければならないと思います。今回の受賞を機に、日本のドキュメンタリー映画の更なる進化を期待したいと思います。

## SARVH プロデューサー賞 選考委員講評

### 日本映画製作者協会 理事 山上徹二郎（シグロ）

長年お二人のコンビで開発してきた企画・プロデュース作品については、ここ数年何度か SARVH 賞の候補に挙がっていました。

今年の審査対象となった『舟を編む』は、映画作品としての質の高さと興行的な成功の両面から、審査員全員納得のういで SARVH 賞に決定しました。

本屋大賞第1位のベストセラー小説とはいえ、大変難しい原作を敢えて映画化することの企画の意外性と先見性、加えて的確な演出とキャスティングが印象に残りました。淡々と進行する物語の中に静かな感動が潜んでいて、映画的な醍醐味を味わうことのできる、本格的な日本映画に出会えたという喜びがありました。

石井裕也監督にとっては、これまでの監督作品とはまたひと味違う、新しい世界観を持った作品として、キャリアアップになったのではないかと思います。主演の松田龍平さんにとっても、新境地としての代表作になったのではないのでしょうか。

本来の意味でプロデューサーの力量が試される作品製作だったと思いますが、見事に成功していると思いました。